漫画でウイルス入門書

高知大の長崎教授発刊

「ウイルスと人との友好の架け橋を目指すネコ博士」として本に登場するニャガサキ博士こと長崎慶三教授

「ゆるふわっと理解を」

ウイルスの世界を漫画で学んでもらおうと、高知大農林海洋科学部の長崎慶三教授(60)が「Dr.ニャガサキのゆるふわウイルス入門」(教育評論社)を発刊した。長崎教授は「新型コロナでいろんな常識が覆される今、入門書も前例がないほどゆるく理解してみて」と呼び掛けている。

長崎教授は岡山県出身。京都大卒業後、水産庁の研究所を経て現職。専門は海のウイルスだが新型コロナウイルス流行で「ウイルス」の言葉を聞かない日はない中、基本的な知識が広まっていないことが気がかりに。ウイルス入門書の刊行を出版社から打診されたのをきっかけに、「ウイルス学の教科書を読むには時間も気力も要る。小学生でも理解できる本を作ろう」と考えた。

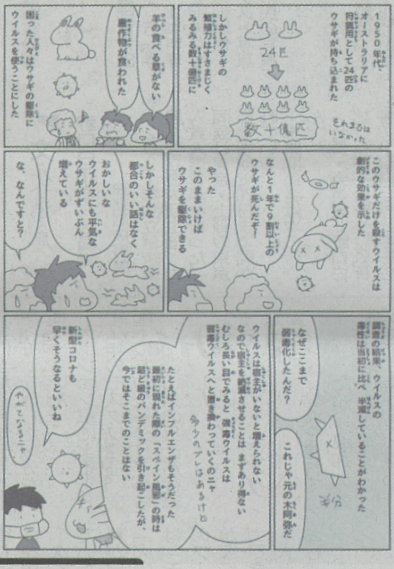
友人で漫画家の、あきのはこさんとタッグを組み、ウイルスに関する50の話題を漫画とエッセーにまとめた。

本の表紙(上)と内容の一部(下)

長崎教授は本に「ウイルスと人との友好の架け橋を目指すネコ博士」である「ドクター・ニャガサキ」として登場。"知ってほしいニャ"と"ネコ語"を操り、「ボクは悪いウイルスじゃないんだよ」と言う「ウイルス君」と一緒に解説する構成にした。

分かりやすさを重視し、ウイルスが意外にシンプルな構造をしていることを「ガチャポンのような入れ物と中の巻物だけでできている」とユニークに例えた。ウイルスは悪い病を引き起こすものもあれば有害な細菌を死滅させるものもあり、病原菌を狙い撃つ治療法として取り入れられていることも紹介した。

また豪州で過去にウサギをウイルスで駆除する作戦が行われたがやがてウイルスの毒性が下がり、失敗に終わった事例を取り上げ、「ウイルスは宿主がないと増えられない。宿主を絶滅させることはあり得ず、長い目でみると、強毒ウイルスも弱毒化していく」と説いている。



新しい感染症の多くは、本来出合うはずのない動物と人との接触が原因となっているとし、コロナもその可能性があると指摘。「人口増、森林破壊、ペットの多様化。人が目先の利益だけ優先すると恐ろしいウイルスとの出合いが待っている」と警鐘を鳴らした。

漢字はルビ付き。長崎教授は「専門用語をぼっさり省き、読者ファーストを意識した。ウイルスに少しでも興味を持ってもらえるようにシリーズ化を目指したい」と意気込んでいる。119ページ。1100円(税込み)。

(村瀬佐保)